キャラクター名: 空条 零

プレイヤー名:

シンドローム	サラマンダー バロール	ワークス	UGN支部長A	カヴァー	UGN支部長
オプショナル		年齢	31	性別	女性
覚醒	憤怒	衝動	殺戮	初期侵食率	35 %
出自	名家の生まれ	経験	平凡への憧れ	邂逅	師匠

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	2	1	0	1		4
感覚	1	0	0			1
精神	3	0	0			3
社会	2	0	0			2

HP	31
行動値	5
(非装備時)	5
戦闘移動	10
全力移動	20

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	1		射撃			ＲＣ			交渉		
回避	1		知覚			意志			調達	1	
運転：	2		芸術：			知識：			情報：UGN	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
終景の導	白兵	4r+1		4+3d+9[4+4d+12]		エンゲージから離れた敵に3D(4D)ダメージ 戦闘移動 HP-5
神崔流抜刀術『旭日之残火』(きょくじつざんか)	白兵	4r+1		22		c値8(7) 対象を戦闘移動2m ダイス+0（1）個

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品

ウェポンケース
思い出の一品:花の飾りのネックレス
遺産『花鳥風月』（鬼切りの古太刀）

ロイス

対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
ロイス：遺産継承者《鬼切りの古太刀》	P	N		
空条 幻斎	P 感服	N 恐怖		
榊場 空助	P 懐旧	N 嫌悪		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P:	6	残り財産P：	4

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：	非オーヴァードのエキストラ化							
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：	コスト分のHPで復活							
コンセントレイト：サラマンダー	2	2	メジャー					
効果：	c値-Lv							
炎の刃	5	2	メジャー	至近	単体			
効果：	攻撃力Lv*2							
アマテラス	3	4	メジャー		単体		リミット	
効果：	前提:《炎の刃》。攻撃力+Lv*4 ダイス-2							
氷の茨	3	3	セットアップ	至近	自身	自動		
効果：	エンゲージから離れた敵にLvDダメージ							
苛烈なる火	3	3	セットアップ	至近	自身	自動		
効果：	攻撃力+Lv*3 HP-5							
クイックダッシュ	2	4	セットアップ	至近	自身	自動		
効果：	戦闘移動 シナリオLv回							
斥力の槌	1	2	メジャー	視界	単体	対決		
効果：	対象を戦闘移動 Lv*2m							
瞬速の刃	1	3	メジャー	武器		対決		
効果：	ダイス+[Lv+1]個							
温度調節	1							
効果：								
快適室温	1							
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

[personal data]
空条 零（くうじょう れい）。女性UGN支部長。元彼と別れてから仕事詰めで男も寄り付かずこの歳まで独り身。そろそろ結婚してはどうかと最近母親がうるさい。氷の太刀を使う剣術と刀に燈した黒い炎を扱う。流派は神崔流、剣術は抜刀術。花嫁修行に勤しんでいるが一向に身につく気配はない。神崔流第１９代当主。
愛用のタバコはPeaceのライト。

[secret data]
神崔流本家である空条家に生まれる。なかなか子宝に恵まれなかった当家にとっては待望の子だった。女の子ではあったものの両親からは愛情を目一杯受けて育てられていた。
しかし前神崔流当主であった空条幻斎には『この時代において女であろうと強くなくてはならない。』という信念のもと物心ついたときから厳しく鍛えられる。
そのためか幼少期はあまり遊んだ記憶がない。小学校のときに男子からつけられたあだ名は『閻魔すら恐ぬ女』であった。
そんなこんなで祖父に反抗することもあったがその都度完膚なきまでにボコボコにされていた。
小学６年生の12月の日、本家の大きな家の清掃の際、倉庫を清掃していた零は倉庫の隅に古めかしい太刀が置いてあるのを見つける。それは埃っぽい倉庫に置いてあったにも関わらず、まるで今置いたかのような佇まいであった。興味からか好奇心からか、まるで決定付けられていたかのように彼女はその刀に手を触れてしまう。その瞬間、倉庫が、爆ぜた。

次に彼女が目を覚ましたときに見た光景は心配する両親の姿といつもと変わらない佇まいの祖父だけであった。
祖父は彼女が目を覚ましたのを確認すると抱き上げて道場に連れて行ってしまう。両親はそれを止めはしなかった。
祖父は道場に着くと、彼女を時分の目の前に置き、美しい太刀を手に持ち構える。
刹那、祖父の体から大気を震わし身を焦がさんばかりの雷と炎が溢れすぐさま刀に収縮されていく。
『この刀を抜いたということは、次はお前が神際流の主だ。明日からもっと厳しく鍛える。』
そういう祖父の目は、今まで見たどの祖父の顔よりも厳かで、そして悲しそうな嬉しそうな、そんな目をしていた。